

人生のご褒美とは？

平成27年5月30日（土）

茨城県立鬼怒商業高等学校 教頭 宇都木 直之

今から三週間ほど前に、偶然NHKのある番組を見た。自分の死後、自分の体を医学の進歩のために献体（学生の解剖実習に使ってもらう）したいという人が増えているというテーマだった。そのような希望をもつ人々がどうしてそう思うようになったか、ということが一人一人インタビューを交えながら丁寧に紹介されていた。私の興味をそそったのは献体という行為ではなくて、その番組で紹介された一人の女性（84歳）の語った一言だった。その方はもちろん献体を希望したから番組に登場したのである。独身を貫き今も一人暮らしで、死後は献体で人の役に立ってから更にその大学の納骨堂に入ることを希望していた。彼女は自分の人生を振り返り、ちょっと間をおいてから「**本当に人生は良かったなあ。悔いはない。**」と言ったのである。そしてその言葉がうそや誇張ではなく、自分の心の底から出ているということがわかるのである。彼女は事務職として次々と同僚が結婚などで退職していく中、独身のまま第一線で仕事を続け、管理職にまでなったとのことであった。在職中はさぼろうなどとは一切考えることなく、自分の良心にも決して恥じることのない程ものすごく仕事をしたという。定年後もサークル活動を掛け持ちしたりして活発な毎日を過ごしてきたようだ。彼女の発するメッセージは「最後まで自分のことは自分で決めたい。」「最後まで自分らしく生きることを大切にしたい。」「自分で、自分の意志で自分の生活をすべて決めてきた。」「人生の締めくくり（死後のこと）も自分で決めたい。」というものだ。彼女は今大きな達成感に包まれているが、それは力みでも虚勢でも誇らしげでもなく、そんなものはとうに超えたところにあるほっとした安堵の表情があるだけに思われた。やり切った者にのみ与えられるご褒美なのかと思った。

短いインタビューではあったが、当然彼女は人生の優等生なのだろうと思った。「素晴らしい人生を自分は送ることができた。」と彼女自身が思っているに違いないからだ。こういう時人は「私は幸せだ。」と言うのだろうが、彼女は最後まで「幸せ」という言葉を一度も使わなかった。幸せなのは当たり前だから言う必要もなかったのかも知れない。彼女にとっては「人生は良かった。」がすべてである。しかしこれはなかなか言えない言葉である。私は「人が幸せに生きる。」ということに興味がある。私自身「自分が今幸せに生きているか。」ということが気になる人間であり、それは若い頃「自分が幸せに生きていない。」と感じて大変悩んだ時期があったからではないかと思う。このことについては本校の生徒たちや中学生の皆さんにも同じ思いがある。人は皆幸せになりたいと思っている。本校の生徒たちやこれから入ってくる中学生の皆さんにも本校に入って良かったと思ってもらえるよう、今年も一生懸命努力していきたい。